



Newsletter No. 39

Maxillofacial Prosthetics

発行人 松山美和

編集 広報委員会

事務局 〒135-0033 東京都江東区深川2-4-11 一ツ橋印刷(株) 学会事務センター内

Tel: 03-5620-1953 Fax: 03-5620-1960

E-mail: max-service@onebridge.co.jp

委員会トピックス

地域医療支援セミナーの開催報告 (地域医療支援委員会)

令和4年6月より新設された地域医療支援委員会の委員長を務めさせていただいております、吉岡 文です。

地域医療支援委員会では、地域歯科医師会等と連携して顎顔面補綴の知識や技能を広く展開することにより、地域を問わず、顎顔面補綴治療が必要な患者様の健康を維持することを目的としています。これまで、大学病院や病院歯科、一部の専門医の先生のもとで限定的に行われてきた顎顔面補綴治療ですが、高齢化や治療方法の発展に伴い、患者様が地域のかかりつけ医で顎顔面補綴治療を希望される機会も増加することと存じます。本委員会では具体的には地域歯科医師会等と連携し、顎顔面補綴に関する講演やワークショップを行っております。

令和5年度は開催テーマを「舌接触補助床の臨床」とし、令和5年11月24日に弘前歯科医師会と共に第1回地域医療支援セミナーをオンラインで開催いたしました。また、令和6年1月27日には頭頸部がんサポート研究会との共催で福岡にて第2回地域医療支援セミナーを行いました。研究会には多職種の先生方が参加されたため、本学会のさらなる学際連携を深めるきっかけ

になったと思います。1月28日には東北大学病院嚙下治療セミナー主催のPAPワークショップへの後援として第3回地域医療支援セミナーを行いました。3月10日には高知県歯科医師会との共催により高知にて、第4回地域医療支援セミナーの講演を行いました。こちらも他職種の先生との講演となりました。講演、ワークショップともに盛況に終わり、地域の先生方からもご好評をいただきました。

今後多くの地域、多職種の先生方との地域医療支援セミナーを予定しておりますので、会員の先生方におかれましては、様々な場面でご助力いただくことがあると思いますがどうぞよろしくお願ひいたします。

(地域医療支援委員会委員長 吉岡 文)



第2回セミナー
(福岡市)



第4回セミナー
(高知市)

特別名誉会員・名誉会員に聞く②（瀬戸院一先生）

前回より、特別名誉会員・名誉会員の先生方のお声を現役学会員にお届けすべく、「特別名誉会員・名誉会員に聞く」の連載を開始いたしました。

第2回日本顎顔面補綴研究会定例会の世話人をはじめ、研究会時代の世話人および学術大会大会長を5回お勤めになられた、初代本学会理事長の瀬戸院一先生から、紙面インタビューの形式で、ご寄稿を頂きました。大変お忙しい中、ご協力を賜りましたことを、紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

（広報委員会委員長 中島純子）

学術大会でのエピソードや学会活動で、特に印象に残っていることを教えてください。

学会立ち上げの学術大会では発起人代表として大山喬史、田中貴信、大西正俊それに私がいろいろな形で挨拶やら講演やらに気合をいれました。4人は医科歯科大学の医局で燻っていた同年配の若侍で、各々米国や欧州から異なった視野を得て帰ってきたものの「日本で何をしようか?」と迷っていたのではなかったかと思い返しています。偶々どこかの技工室のような狭い部屋で4人が出逢った短い会話の中で突然「顎顔面補綴学会を創ろう」との発想が湧き出て妙に意見が一致して、それがそのまま実現したように記憶しています。実際に開いてみると会場には驚くほど大勢の参加者の熱気に圧倒された事を記憶しています。その後に業界誌に「初めての学際学会の発足」という記事が大きく掲載され勇気づけられました。

昨年久しぶりに名古屋の総会に招かれて、半世紀を経てなお当初の熱気が会場に満ちているのに驚嘆致しました。この学会はいまに業界をひっくり返すかもしれないと思いました。

今後の顎顔面補綴学会に期待されることを、教えてください。

医科歯科2元制を堅持しながら、医科と歯科が同等の教育を別々に行い、国民医療を分担している事は日本の歯科医学の誇りです。そのアイデンティティを維持発展させて国民の理解を得ようと、歯学者は医学とは別の文化圏を創出する努力

を重ねて参りました。生活医療として千年の歴史を持つ歯科医療は戦後に突然医学と同等の重みを与えられたわけです。当然ながら歯科医学は独自の文化のすそ野を拡げて多くの専門分野の形成をはかることが自然の趨勢でした。その結果細かい専門性が乱立して、意欲的な研究者は細分化された専門性の中に閉じこもることになるのも当然の帰結でしょう。

そんな中で顎顔面補綴学会が半世紀前に自然発生的に若い有志により創出され、今もって初志貫徹で口腔機能再建歯科医学への発展を目指している事に敬意を表します。

本年顎顔面補綴学会と顎顔面インプラント学会が一緒に開催されることは画期的なことです。今後の限りない発展を期待して止みません。

これから顎顔面補綴学会を担う現役学会員に、一言お願いを致します。

顎顔面補綴学会は、日本の歯科医学の方向性を決める有力な学術団体のひとつです。人生百年時代を迎なながら人口減に悩む日本にとって口腔機能再建歯科医学は最も大切な科学のひとつです。顎顔面補綴学の研究の間口を拡げて医学、工学、薬学、化学など多方面の科学と連携して新しい歯科医療科学を先導してください。科学に国境はありません。豊かな発想の転換で簡単に道は開けると思います。

学会員の活動の紹介

2023年度優秀論文賞受賞者の声



深澤 加奈 先生
愛知学院大学歯学部
有床義歯学講座

この度は2023年度日本顎顔面補綴学会優秀論文賞という栄誉ある賞をいただき大変光栄に思っております。これまで多岐に渡りご指導いただきました武部先生、尾澤先生はじめ、調査・研究にご協力いただきました先生方に心より御礼申し上げます。

入局時より興味のあった論文執筆を入局5年目という節目の年に行うことができ、形になり喜ばしい限りです。また私がこの調査を始めた頃は新型コロナウイルス感染防止に伴い、学会はリモートで行われ、第一報としてオンラインにてポスター発表を行いました。本大会が無事、対面で行われることも幸甚です。

本論文では、下顎顎欠損に対する顎義歯の支台装置の選択に関して調査および分析をしました。装置数や、支台装置数および支台装置の種類等を顎欠損の様式別に調査することにより、各担当医の臨床経験を全体的な傾向として把握することができました。

今回の調査では顎義歯の構成要素のうち支台装置に着目して行った調査でしたが、大連結子や、配列位置等様々な顎義歯の要素についても調査が必要であると考えられ、一般的な義歯に比べると症例数は少ないですが、今後のさらなる調査・発展が顎義歯の設計における一助となれば幸いに存じます。

会員の施設紹介 北海道大学

北海道大学は、1984年に本学会の記念すべき第1回総会が大畠昇教授を総会長として開催された地になります。北海道大学病院での顎顔面領域における補綴治療は、主に顎義歯とエピテーゼが代表的ですが、特に顎顔面補綴に特化した外来を行っている訳ではありません。症例によっては、形成外科、口腔外科、補綴科、矯正科が連携してカンファレンスを行い、治療方針の検討に当たりますが、顎義歯などの場合は、個々の担当者が日常診療の一部として対応していることも多くあります。エピテーゼに関しては、製作は生体技工部が担っていますが、病院内での周知が進んだこともあります。医科の先生からの製作依頼が主体になってきているようです。

北海道大学では、国産初の歯科用 CAD/CAM システム GN-I (ジーシー) の開発を担ったこと、また、産業用光造形機 (3D プリンター) の国産2号機を導入して長年に渡り 3D プリント技術の医療応用について研究開発を行ってきた経緯などから、生体技工部では、これらの利活用が進んで、歯科や顎顔面補綴領域に限らず病院全体からのさまざまな製作物の依頼に応じて、医療技術全体の向上を目指しております (写真)。今後とも、この分野では先進的な取り組みを進めていきたいと考えております。

(北海道大学歯学研究院・冠橋義歯補綴学教室
上田康夫)



北海道大学病院生体技工部で稼動している複数の3Dプリンターの1台と、様々な製作物

会員の施設紹介 NHO 嬉野医療センター歯科口腔外科

嬉野医療センターは、旧国立嬉野病院（昭和12年嬉野海軍病院として創設）と旧国立療養所武雄病院（旧佐賀県結核療養所柏翠荘）が平成12年に統合され、国立嬉野病院となり、平成16年に組織改編に伴い、国立病院機構嬉野医療センターと名称変更となった。病床数は399床で、佐賀県南西部の高度急性期医療を担う地域中核病院として、がん診療連携拠点病院、地域災害拠点病院に指定されている。

歯科口腔外科は、2019年6月の新築移転に伴い新設され、5年が経過した。私は、新病院が建築中であった2019年4月から開設準備のため赴任した。赴任した当時は、私と歯科衛生士の2人からのスタートであったが、現在、歯科医師2名（口腔外科専門医2・指導医1、口腔インプラント学会専門医2、顎顔面補綴学会認定医1、顎関節症学会認定医1、がん治療認定医1）、歯科研修医1名、歯科衛生士5名、受付1名、医療事務1名の10人で業務を行っている。病院歯科なので、業務内容は、口腔外科全般（入院、外来）、他科入院患者の歯科治療や対診・往診対応、周術期口腔機能管理や緩和ケアでの口腔管理、NSTでの活動などが主な業務である。年に10数例程度、当科で手術した患者や耳鼻科から紹介された口腔がん患者の顎義歯やPAPなどの顎補綴治療を行っている。最近の傾向では、MRONJ（薬剤関連顎骨壊死）による顎欠損症例が多くなっているので、顎義歯の症例が以前よりも増えてきている傾向にあるため、研修医にも顎義歯の印象などを共に行いながら指導している。今後は、地域の開業の先生方にも顎義歯やPAPの普及を進めていきたいと考えていますので、先生方のご協力を願っています。

（嬉野医療センター歯科口腔外科 井原功一郎）



国立病院機構
嬉野医療センター

関連学会報告

第25回日本口腔顎顔面技工学会学術大会

2023年11月25日（土）、26日（日）に第25回日本口腔顎顔面技工学会学術大会が「歯科医療のタスクシフトは可能か」をテーマに東京両国のKFCホールアネックスにて開催されました。今回はコロナ禍を経て4年ぶりの対面開催で大会初の2日間という事もあり、特別講演3題、宿題講演1題、一般口演16題と過去最多の演題数でした。

特別講演ではこれからの超高齢社会で歯科技工士は従来の補綴装置の製作だけでなく摂食嚥下の機能障害がある患者への口腔内装置の製作や、訪問診療において技工士が同行し義歯修理など即時対応する事により摂食嚥下機能の改善が期待できることを例に挙げ、高齢者医療で重要な役割を担う可能性が示されました。しかし一方で歯科技工士不足や人材育成のためのカリキュラムの見直し、歯科技工士法の改正、診療報酬の改定などの諸問題と障壁がある事も述べられていました。

一般口演では歯科以外の診療科との連携による症例報告やデジタル機器を用いた口腔内装置の製作法のほか、エピテーゼ関連では新たな接着方法に関する研究と考察、モロッコでの技術指導の経験と実情報告などがありました。次期大会は仙台歯科技工士専門学校を主幹校に11月16日に開催される予定です。 （広報委員 宮本哲郎）



第27回日本顎顔面インプラント学会学術大会

2023年12月2日（土）、3日（日）に第27回公益社団法人日本顎顔面インプラント学会総会・学術大会が国際医療福祉大学矢郷香大会長の元、同大東京赤坂キャンパスにて開催され、約700名が参加されました。大会テーマは、「インプラント関連手術を多面的、多角的に再考する」とされ、東京歯科大学服部雅之先生の教育講演、医師・作家の前国際医療福祉大学特任教授の和田秀樹先生による特別講演、「上顎無歯顎のインプラント治療の展望」、「骨造成一失敗しないための工夫とリカバリー」、「全身的リスクファクターとなる患者のインプラント治療」、「インプラント周囲炎の対応とインプラント撤去基準」、「チームアプローチで行う広範囲顎骨支持型装置」の5つのシンポジウム、一般演題97題とともにどの会場も盛況で活発な討論が行われました。またポスター会場では、ポスター in wineと称し、All-on-4®インプラント治療を開発したパウオ・マロ先生のワイナリーで造られたマロ・ワインを飲みながら、和やかな雰囲気で質疑応答が行われました。

本年度は日本顎顔面インプラント学会学術大会と本学会学術大会との共催という初の試みも控えています。新たな交流、知見の共有が期待されます。

（国際医療福祉大学 石崎 憲）

日本義歯ケア学会第16回学術大会

2024年2月17日（土）～18日（日）に東北大学星陵会館にて対面で学会が行われました。

一般口演12題のうち顎補綴に関連した口演が1題あり、医学部耳鼻咽喉科と連携した早期暫間顎義歯の症例報告がありました。術後に食器用スポンジを欠損部に挿入している写真を見て衝撃を受けました。また、サージカルオブチュレータ未使用で、術後に術前印象から製作したスプリント用シートを維持装置とした暫間顎義歯の装着で効果があったとのこと、本学会でもっともっとISOの有効性や術前から周術期、術後にかけてのチーム医療で顎補綴に取り組むことを、啓発していかなければならぬと痛感しました。

教育講演では、東北大学小山先生による「顎義歯と広範囲顎骨支持型装置・補綴の臨床」と題して、保険の上顎・下顎顎義歯やインプラントを利用した顎補綴治療について、顎顔面インプラント学会の診療アルゴリズムを使って解説され、一般歯科医師でも大変わかりやすく、治療について基礎から解説され、大変勉強になりました。特に下顎症例に対する東北大学キャンサーボードによる術前からの医歯連携について大変すばらしいと思いました。

（広報委員 大木明子）

過去に学び、未来のために

論文データベースの医学中央雑誌で「顎補綴」と検索をすると、1930年の論文からヒットし、それ以前の論文では「顎補綴、顎骨補綴」は「顎骨補欠術」、「顎骨欠損」は「口蓋破裂」という用語が使用され、1922年の論文が検索されます。

現在、医中誌には1903年からの論文が提供されていますが、本学会会員の柳沢治之先生（浜松市開業）が、約30年前の第11回学術大会シンポジウム（顎顔面補綴の潮流—学術用語とその背景をめぐって—）の大山喬史先生のご講演にあたり、手作業でそれ以前の顎顔面補綴に関する本邦における学術論文をお調べになり、その資料を

頂戴いたしました。ニュースレターでは新企画として、本邦における顎顔面補綴の学術論文の源流を発掘し、入手可能な古い論文を広報委員が紹介をします。何分、句読点が全くなく、旧字体、文語体で書かれた文章ですので、解釈に間違いがある場合もありますが、ご容赦頂けると幸いです。

柳沢先生の資料によると、本邦で最古の顎顔面補綴に関連する論文は、明治30年の東京歯科大学の前身、高山歯科医学院の院友会の機関誌「歯科医学叢談」（現・歯科学報）第2巻に掲載された廣瀬 武先生の「口蓋破裂ニ就テ」です。本稿では、概要を紹介します。（広報委員 中島純子）

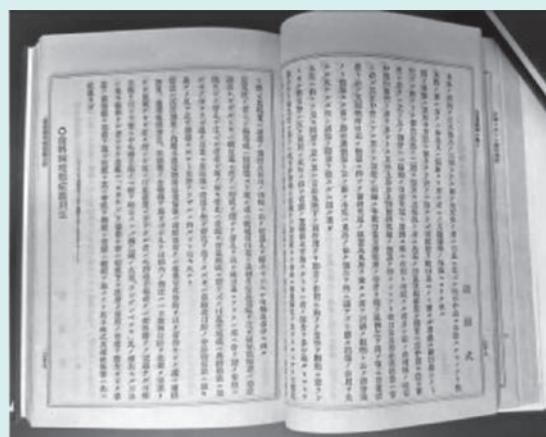
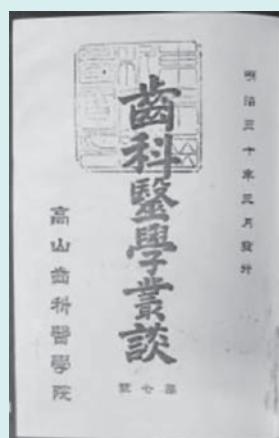
廣瀬 武：口蓋破裂二就テ。
歯科医学叢談 2:25-27, 1897

＜要約＞口蓋欠損（口蓋破裂）の原因は、先天性と後天性があり、先天性が多い。後天性は、梅毒、結核による狼瘡、銃創などの外傷により生じる。大きさは多様で、左右に及ぶ複性と偏側の単性に分類される。上唇や上顎歯槽突起、口蓋垂の裂を伴うこともあり、軟口蓋、硬口蓋の披裂、歯槽突起の破裂、禿唇を伴うものを狼咽という。

口蓋破裂により最も障害を蒙る（被る）のは、言語および嚥下の作用である。舌の作用で食物を咽頭に送る際に食物は鼻腔に逆行するが、舌の運動の修得により多少免れる。乳児では嚥下作用が困難となり全身に栄養障害を及ぼすことがある。

梅毒や狼瘡は、軟硬口蓋に炎症、潰瘍を最初に生じ、その後粘膜を侵して穿孔し、硬口蓋では骨を侵し骨疽をきたし穿孔を生じる。鼻腔および口腔の分泌物は腐敗しやすく、清掃が不十分になる。沃度加里（ヨウ化カリウム）の内服、水銀の塗布、

硝酸銀、格魯兒化亜鉛（塩化亜鉛）での腐蝕、過満俺酸加里（過マンガン酸カリウム）や明礬で含嗽を行う。1日数回口腔内を洗浄し清潔にする。口蓋破裂に至った者は外科手術を要する。



関連学会のご案内

●第30回日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会
会期：2024年8月30日（金）～31日（土）
大会長：弘中 祥司（昭和大学口腔衛生学講座）
会場：福岡国際会議場・マリンメッセ福岡 B
館・福岡サンパレスホテル



●71st Annual AAMP (American Academy of Maxillofacial Prosthetics)
会期：2024年11月3日（日）～5日（月）
会場：LaPlaya Hotel, Naples, FL



●第41回日本顎顔面補綴学会総会・学術大会
第28回日本顎顔面インプラント学会総会・学術大会
会期：2024年11月30日（土）～12月1日（日）
大会長：古賀 千尋（福岡歯科大学口腔医療センター）

城戸 寛史（福岡歯科大学口腔インプラント学分野）
会場：福岡国際会議場



コンテンツ

委員会トピックス	1
特別名誉会員・名誉会員に聞く②	2
学会員の活動の紹介	
2023年度優秀論文賞受賞者の声	3
会員の施設紹介	3
関連学会報告	
第27回日本顎顔面インプラント学会学術大会	4
日本義歯ケア学会第16回学術大会	5
第25回日本口腔顎顔面技工学会学術大会	5
過去に学び、未来のために	
廣瀬 武：口蓋破裂二就テ	5
関連学会のご案内	6

皆様のご意見をお寄せください。

一般社団法人日本顎顔面補綴学会 広報委員会
委員長 中島純子
委員 猪原 健、大木明子、関谷秀樹、
勅使河原大輔、宮本哲郎、吉岡 文
E-mail : max-service@onebridge.co.jp